



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	『曾呂里物語』の類話(fulltext)
Author(s)	湯浅, 佳子
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. 1, 60: 307-330
Issue Date	2009-01-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/96207
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

『曾呂里物語』の類話

一、はじめに

『曾呂里物語』（五巻五冊、寛文三年刊）は、近世怪異小説の一流流とされる仮名草子である。従来、諸話の出版・類話や後世への影響については、頼原退蔵氏、檜谷昭彦氏をはじめとする諸氏によって指摘がなされてきた。本稿では、それらの先行研究をふまえつつ、『曾呂里物語』諸話の類話をあげ、当作品の成立の背景についての手がかりとするものである。

二の類話一覧では、まず『曾呂里物語』の各話の梗概を、その後に、類話と思われる話の作品名と話の梗概を示す。なお、作品名の後に△▽を付け、その作品と『曾呂里物語』との類話関係について指摘した先行研究を示した。また○印は、先行研究や各話の性格についての私見を述べたものである。

二、類話一覧

巻一の「板垣の三郎高名の事」

駿河国の大森、今川藤が府中に在城の時、甲斐国の勇者板垣三郎が、魔所という千本の上の社へ肝試しに出かける。九月中旬の月夜、石段を上っていくと、杉の木の上からへぎ一枚が落ちてきたのを、板垣は踏み割って通った。社に参詣してしるしを立てて帰ると、白い練りの単衣を着、角が生え目一つの女房が現れるが、板垣が刀を抜くと消える。板垣が無事を大森へ報告していると、俄かに大雨となり、腹を踏み割ったことを板垣に懺悔せよという声が虚空より聞こえる。人々は板垣を唐櫃の中へ入れて隠したが、雨も止んだ五更の頃、唐櫃の蓋を開けると板垣はおらず、そこへ虚空から大勢の笑い声がし、板垣の首を縁上に落とす。

『諸国物語』（五巻五冊、延宝五年刊）の一の「駿河の国板垣の三郎へんげの物に命をとられし事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』一の一と同話。ただし『曾呂里物語』の「大森今川藤」は

湯 浅 佳 子
(日本語・日本文学)

『諸国百物語』には「儀本」とあり。『諸国百物語』当話については、すでに江本裕氏の指摘があり、「儀本」には今川義元、「板垣の三郎」には武田信玄の重臣板垣三郎佐衛門信形が想起されるとする。なお、板垣が化物と遭遇したという「千本」の上の社（不明）は、『諸国百物語』には「浅間」とある。現在の静岡浅間神社（静岡市）のことか。この浅間神社については、信玄と義元がそれぞれ当社との関わりを重視していた（『静岡県の地名』日本歴史地名大系、平凡社）。本話は、信玄の家臣板垣三郎が、府中の今川義元のもとで、その勇者ぶりを示すために肝試しに出かけた話か。

巻二の二「女のまうねんまよひありく事」

ある男が、越前国北の庄のさはやといるところで、石塔の下から鶏が現れ、女の首になるのを見る。首が男を見て笑ったので、刀で斬り付けると逃げ、府中かみひぢのある家へ入る。男が外から家の中をうかがうと、女房が夫を起し、男に斬られそうになって逃げる夢を見て大汗をかいたと語る。そこで男が家に入り、出来事を語ると、女房は我が身の罪業を恥じて、北野真西寺で出家した。

『諸国百物語』二の三「越前の国府中ろくろくびの事」へ太刀川▽

○『曾呂里物語』一の二と同話。ただし、『曾呂里物語』の「北の庄」は『諸国百物語』では「喜多の郡」、「かみひぢ」は「上市」、「北野真西寺」は「嵯峨のをく」とあり。「北の庄」は現在の福井の旧称。「上市」は福井県武生市上市町か（現在の越前市武生柳町・若竹町）。京都北野の「真西寺」は不明。

『太平百物語』（五卷五冊、享保十七年刊）四の三十六「百々茂左衛門ろくろ首に逢ひし事」

若狭国の百々茂左衛門が、ある夜、水谷作之丞の屋敷に水谷の腰元の首があり、笑いかけたので、杖で突くと、高塀の内に落ちた。その腰元は目を覚まし、茂左衛門に頭を打たれ逃げたという夢をみたと語る。茂左衛門は水谷にこのことを語り、水谷から話を聞いた腰元は恥じて尼となったという。

巻二の三「女のまうねん生をかへてもわすれぬ事」

ある僧が女と恋仲となって還俗したが、その後後悔し、ある高僧のもとで修行していた。しかしそこにも女がしばしば訪れるのを疎ましく思い、ある時病の折に友の僧に頼んで留守を装うと、女は少し顔色を変えて帰った。やがて僧が悟りの境地に入ると、これを知った女は寺を訪れ、嘆く様子もなく、僧は五百生以前よりの敵であるから、これまで成仏を妨げてきたのだと、鬼神に姿を変じて天に昇っていった。このようなことは仏も説かれており、恐れ慎むべきだ。

『三國伝記』（十二卷、玄棟編）二の二七「信濃国遁世者往生事」へ和田▽

信州の遁世者、善阿弥、尼公を妻女とし、深く契る。しかし善阿弥には近くと同様の遁世者があり、互いに二世を頼みあっていた。ある時、善阿弥は病となり臨終間近になる。そこでその遁世人を呼び、病が重くなったら奥へ移して尼を近づけないよう頼む。しかし尼が離れないので、遁世人が尼に薬を取りに行かせると、その間に善阿弥は往生した。その後これを知った尼は、拘楼孫仏の時より夫婦の語らいをし、善阿弥が解脱を得ようとするのを妨げたのに、騙されて口惜しいと、青鬼となって天へ昇っていった。魔性が邪魔をして人を悪道に入れることはこのような様子で、恐るべきことだ。

○『三國伝記』池上海一氏注、『榻鳴曉筆』市古貞次氏注には、類話として

『発心集』四の四二、『私聚百因縁集』九の二十一「肥州僧妻為魔事」、『拾遺往生伝』下の二〇、『沙石集』四の五「婦人の臨終の障たる事」をあげる。

『榻鳴曉筆』（二十三卷、大永・享禄頃成立）十三「怨念」五「肥後国女」

『直談因縁集』（八卷二冊、天正十三年以前成立）五「安樂行品下」二十六

『諸国百物語』二の八「魔王女にばけて出家の往生を妨げんとせし事」へ太刀川・和田▽

○『曾呂里物語』一の三と同話だが、「撰州勝尾寺」（現在の大阪府箕面市の勝尾寺）での話となる。

巻二の四「一条もどり橋のばけ物の由来の事」

都戻り橋のあたりに毎夜化物が現れるというので、由緒ある一人の武士が、

夜に橋の辺に棧敷を設け、化物を見届けようと妻女とともに待っていた。そこへ常日頃武士のもとに出入りする座頭が来て、平家などを語る。夜更けて夫婦が眠ると、座頭が夫婦に飛び掛って長い手で頭を押さえる。男は手足に網が掛かったように動けなくなつたが、漸く相伝の来光国で斬り払う。火を点してみると、手足は龍のようで、長さは一丈三尺五寸、頭は酒呑童子のようである。これは年取つた蜘蛛が人を化かしたのである。その後、橋にさらして人に見せたということである。

卷一の五「ばけ物女に成て人をまよはす事」

ある人が加賀国の町屋の娘と密かに恋仲となつた。ある夜、男の寝屋に娘がいながら、宿主のあたりにもその娘の声がしたので、仲立ち人は不審に思い、宿主のもとへ行くと、同じ娘がいた。仲立ち人が男にこのことを告げると、男は変化の所為だとして、娘を引き寄せて一刀刺すと、その姿は消えた。夜明け、血痕を辿っていくと、山奥の岩穴に女の死体があり、日数が経つと普通の様子で朽ちていった。宿主の女は無事であった。

『今昔物語集』二十七「狐、変人妻形来家語第三十九」

京の雑役をする男の妻が、夕暮れに大路に出かけて帰って来ないので夫が不審に思っていると帰ってきた。しばらくするとまた同じ顔の妻が帰ってきた。斬ろうとすると、どちらの妻も泣いて否定する。悩んだ末に前に来た妻が怪しいので、これを捕らえてみると、臭い尿を掛けて逃げていった。男は悔しがったという。このような場合には心を沈めて考えるべきだ。本当の妻を殺さなかつたのは運がよかつたと語り伝えたということだ。

『諸国百物語』二の六「加賀の国にて土蜘蛛にばけたる事」ハ太刀川

○『曾呂里物語』一の五と同話。

『太平百物語』二の十七「栄六娘を殺して出家せし事」

讃岐国の栄六が、酔つて、道で寝ていた狸を打つて脅かす。帰宅すると娘が二人になつていた。栄六が一人を斬ると、もう一人の娘は狸になつて逃げようとしたので、これも斬つた。栄六は娘を斬つたことを嘆き、出家したという。

卷一の六「人を失ひて身にむくふ事」

津国大坂の兵衛の次郎が召使の女と恋仲になるのを本妻が妬み、男が留守の折に女を井戸につき落とし殺したが、兵衛の次郎はこれを知らずにいた。その後、息子が病となり、様々に祈禱したがしるしなく、あまのふてらやの四郎右衛門という高名な針立てを呼んで治療をさせる。ある月夜、四郎右衛門の前に女の幽霊が現れ、生前に本妻から受けた仕打ちを語り、子はどれほど治療しても治るまいから、速やかに帰れ、さもなければ憂き目を見せんと告げる。やがて女の姿は鬼女となり、四郎右衛門は絶入する。これを知つた兵衛の次郎は思い悩み、四郎右衛門と相談する。一両日後、女の幽霊が四郎右衛門の枕上に現れて恨みを述べ、北の方に思い知らせんと、天井から大岩を息子めがけて落として殺す。本妻は嘆き悲しみ、以降、本妻の一門は悉く滅び、本妻も重病となつたという。

『諸国百物語』五の十一「芝田主馬が女ばう嫉妬の事」

丹後国みやづの芝田主馬の本妻は嫉妬深く、腰元のみちぢを井戸で殺す。主馬はこれを知らずにいたが、三人の息子が急死する。間もなく本妻は子出産するが、病がちのため、主馬は浪人の紹介で針立てを呼んで治療させる。その後、浪人と針立てのもとに、腰から下は血に染まり、髪は逆立ち顔は青ざめた女が現れ、本妻の仕打ちへの恨みから三人の子を殺したこと、どれほど治療しても子は治るまいと告げる。その時、子どもが亡くなる。その後浪人が主馬に事情を語ると、主馬は本妻を離縁し、自らは主家したという。

○『曾呂里物語』は津の国大坂の兵衛次郎の話、『諸国百物語』では丹後国宮津の芝田主馬の話である。また、『曾呂里物語』では針立ての名前が、『諸国百物語』では殺された女の名前が明記されている。

卷一の七「罪ふかきもの今生より業をさらす事」

京北野辺に慳貪女あり。男が一条戻橋の辺を曉頃通ると、老女が死体を食べている。よく見るとそれは、母であった。急いで我が家に戻つて母を起こすと、母は、恐ろしい夢を見たという。それは、橋の下に死人のあるのを引き裂いて食つたようだが、浅ましいと思ひながらも嬉しい心地がした、

と言う。ほどなく老女は亡くなったが、今生の罪業が深かったので、来世はさぞ、と思いやるのさえ不憫である。

平仮名本『因果物語』(六巻六冊、寛文年間刊)三の十一「魂とび行て、尸をくらひける事」△堤2▽

山城から丹波への途中の沓懸に太兵衛という者がいた。太兵衛の知人で、京の四条に住む喜右衛門という哀若切る者には、らい病の気があった。太兵衛が賀茂川辺の墓所に行くと、喜右衛門が屍を食べていた。太兵衛は見ぬふりをして通り過ぎ、宿にいた喜右衛門に会うと、喜右衛門は、賀茂川辺で死人を食べるといふ不思議な夢を見て、口内が血生臭く、胸が悪いと語る。そこで太兵衛が見たことを語ると、喜右衛門は発心出家し、らい病も本復した。太兵衛も道心を起こし念仏と慈悲を専らとした。これは太兵衛が語ったことを野尻万介という人が一心という僧になって後語った。

片仮名本『因果物語』(三巻三冊、寛文元年刊、鈴木正三著)下の一七「人ノ魂死人ヲ喰事付精魂寺工来事」

○平仮名本『因果物語』と同話。

『諸国百物語』一の五「木屋の助五郎が母夢に死人をくひける事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』一の七と同話だが、老女の息子の名を木屋の助五郎とする。

堤氏は、『曾呂里物語』『諸国百物語』には発心遁世譚がなく、作者の興味は貪女が夢中に人を食うという奇談そのものを描く点にあると指摘。

△堤2、第一部第二章▽

『新御伽婢子』(六巻六冊、天和三年刊、西村市郎右衛門著)二の五「人喰姥」

○橋の袂に出現して人を食う老女の話という点が『曾呂里物語』と類似する。

巻一の八「狐人にむかひてわびことする事」

寛永八年末の年、関東武蔵国のさる屋敷の溜め池にいた白雁を狐が獲ったので、主人が怒って狐狩りを命じる。その夜の宿直人の夢に二度、白雁を獲ったのは他の狐で、それを成敗するから狐狩りをやめて欲しいとあったので、それを主人に告げると、主人は狐狩をやめた。夜明け、大きな狐五匹を殺して縁に置いてあったという。

『古今著聞集』十七「変化」六〇六「大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老

狐夢枕に立つ事」

大納言泰通の五条坊門高倉亭には狐がいて化けていたが、不都合もなかったものでそのままになっていた。しかし化けることが甚だしくなってきたので、大納言は怒って、狐狩りを命じる。その夜明け頃の大納言の夢に、年取った寺童子が木賊色の狩衣を着て西向きの坪庭の柑子のそばに畏まり、今後は化けることを慎むので、狩はやめて欲しいと願う。目覚めた大納言が庭を見ると、柑子のそばに老狐がいて逃げ去った。大納言が狐狩りを中止すると、化物は現れなくなった。しかし、家に吉事があるような時には必ず狐が鳴いて告げるといふ。

巻一の九「舟越大蛇をたいらぐる事」

淡路国に弓矢取りの名人舟越という者がいた。その領内の池に大蛇が棲み、洪水を起すので、村人は毎年女を人御供にしていた。舟越は、このままでは領地に女人が絶えるということで、自ら馬に乗って池に向かい、大声で呼ばると、大蛇が現れ、襲ってきたので、舟越が大蛇の口を弓で射る。乙矢を射る暇がなかったので急いで逃げると、大蛇が追いかけてくる。屋敷に逃げ込んで門を閉め、門の上に大蛇が現れたのを乙矢で射ると、手ごたえあって大蛇は死んだ。しかしその後、舟越も気を失い、三日後に亡くなった。葦毛の馬も死んだということだ。

○生贄の娘が勇者によって救われる話は、『宇治拾遺物語』一一九「東人、生贄を止むる事」や『今昔物語集』二十六「美作国神、依獵師謀止生贄語第七」に、山陽道美作国に住んで生贄を取る猿神と蛇神を、東の荒武者が飼犬を使って退治し、娘を救うという話がある。また民間伝承にも、回国の僧が竹篋太郎を使って化物を退治し、生贄の娘を救う話がある(『日本昔話大成』二五六「猿神退治」(cf.AT300))。しかしこの話はむしろ、以下の諸作品にみられる舟越の大蛇退治と同話である。

『本朝故事因縁集』(五巻五冊、元禄二年刊)四の八十八「淡路島大蛇」△須田▽淡路国の広池に大蛇が住み、人々を食べていた。郡主で武勇の誉れ高い舟越五郎何某は、国民を悩ます大蛇を退治しようと、深淵に馳せ行き、現れた大蛇の喉を射通し、湖に沈める。しかし大蛇が再び襲ってきたので、舟

越は馬を馳せて屋敷に戻り、門戸を閉じると、追ってきた大蛇はついに死んだ。舟越はその首を斬ってさらしたという。

『武將感状記』（『近代正説碎玉話』十巻十冊、正徳六年刊、熊沢淡庵編）巻八

△須田▽

舟越は三好氏の三男で、淡路の周本に在城し、播磨・紀伊と戦っていた。（略）三年続けて、大雨洪水の後に必ず早魃し、民が困窮した。これは、しどりの池に棲む大蛇の仕業という。舟越は、これを口惜しく思い、弓矢を持って池に行き、馬を池の汀に留め、大声で呼ばれる。そこへ家臣の納氏、加治氏らが馳せつけた、やがて水上に二尺ほどの小蛇が浮き出たので、舟越はこれを詰ると蛇は水底に沈んだ。すると急に嵐となり、巨大な口から火のような舌を出して、大蛇が舟越に襲いかかった。舟越が大雁股を口中に射込むと、一旦は倒れたが、起き直って舟越に遅いかかる。舟越は、納、加治と共に馬に鞭打って逃げるが、大蛇は之を追ってくる。草木の上を走る音は疾風のようなのである。池から周本の城までは一里半ほど、その途中のあまという所の大楠の森で、大蛇が舟越を見失ったところで、舟越は二の矢を射た。その矢は喉に当たって大蛇は弱ったが、なお追ってくる。城に戻って門を閉めると、大蛇は門を登り越えようをするのを、納が長刀でその首を斬った。その時、大蛇が熱湯のような息を吹きかけたので、納も加治も、その毒気に触れ、その日に病死した。門番の足軽五六人と、馬三頭も即死した。舟越も、三四日後に皮膚が赤く爛れて亡くなった（8才〜10才）。

『諸家深秘録』（二十四巻）「舟越三郎四郎殿射殺大蛇其身も果事」

舟越三郎四郎が江州に在住の折、領地内に幅二町程もある沼に大蛇が棲み、往来の人々を襲うので、舟越は人民の災いを除こうと馬に乗って池に向かい、呼ばわると、大蛇は沼の中島の弁財天宮へ上り、十二の角を振り上げた。舟越が大雁股を大蛇の口中に、また二の矢を眼玉に射込み、そのまま引き返すと、大蛇が追ってきた。舟越は一息に屋敷内へ乗り込み、玄関の箱段に上ると、遂に亡くなってしまった。乗り放した馬も白洲に倒れて死んだ。大蛇は、門から入れないので、裏へ回って家の棟を乗り越え襲ってくるのを、大勢の家来がこれを仕留めた。今でもこの大蛇の首が舟越家に

代々伝わっているということである。

○ 須田千里氏の指摘するように、『本朝故事因縁集』には『曾呂里物語』の最後の場面にいう舟越が死ぬ話がない。『曾呂里物語』の内容により類似するのは『武將感状記』『諸家深秘録』で、いずれも『曾呂里物語』の生贄の話を除いてほぼ同内容で、また『曾呂里物語』よりもさらに具体的に詳しい内容が記されており、両作品は『曾呂里物語』と同じ系統の伝承に基づいたのではないかと思われる。なお『老嫗茶話』（八巻三冊、寛保二年序、三坂春編選）「船越殺大蛇」には、『武將感状記』に拠ったことが明記されている。『弁惑金集談』（四巻四冊、宝暦九年刊、河田正矩著）巻四「舟越氏伝大蛇頭事」も『武將感状記』等に拠ったかと思われる。また『淡路国名所図絵』（五巻五冊、明治二十七年刊、暁鐘成著、松山半山・浦川公佐画）では、『俳諧志都織』（二冊、宝暦五年序、弓羅等編、茶雷撰）の「因記委文八幡宮等事」を引用し、文明の頃（他説に文明三年と記す）に勇士船越左衛門尉定氏が慶野の原潜洲が測の大蛇（他説に古津路の大蛇）を射たこと、その矢が委文八幡宮に奉納されたことを記す。さらに、里老の伝説、古書、『武將感状記』『金集談』『諸家深秘録』の書名と諸説をあげ、船越氏の由来や、大蛇退治にまつわる地名等を記している。

巻一の十一「狐をおどしてやがてあをなす事」

ある山伏が、野で寝ていた狐の耳元でほら貝を吹いたところ、狐は驚いて逃げた。その後、たちまち日が暮れたので、三味堂で火屋の天井で寝ていると、葬式の集団がやって来て火葬を行って帰っていった。その後、火中から死人が出てきて山伏を見つけ、飛びかかってきたので、山伏は気絶した。正気に返ると未だ昼間で、三味堂もなかった。そこで、これは狐の仕返しだと分かったのである。

『今昔物語集』一二十七「於幡磨国印南野、殺野猪語第三十六」

△新編日本古典文学全集『今昔物語集』四「出典・関連資料一覧」二〇〇二年、小学館▽

西国からの飛脚が播磨国印南野で日が暮れたので、とある庵に宿る。夜更け、葬送の集団がやって来て、亡骸を葬って去った。その後墓が動き死体

が出てきて庵の方へ来た。男は鬼と思って死体を斬ると死体は倒れた。男は人里へ逃げ、このことを語った。人々が庵のあたりへ行ってみると墓も火もなく、大きな野猪が斬り殺されていた。これは、野猪が男を化かそうとしたのである。無益なことをした猪だと人々は言い合った。人里離れた野中などには少人数で宿ってはいけない。

『諸国百物語』一の一六「狐山伏にあだをなす事」へ太刀川▽

○『曾呂里物語』一の十と同話。

『諸国百物語』五の八「狸廿五のぼさつの来迎をせし事」

東近江さこうとう村の山奥の惣堂に、狸が忍び入って坊主の食料を盗む。ある時、坊主が焼石で狸を折檻すると、狸は逃げ帰る。その後、仏壇の本尊が輝き出して仏が来迎し、坊主にはやく火定に入るよう勧める。坊主は喜び、堂の前に人々を集めると、午の刻ほどに西方より三尊その他二十五の菩薩が来迎した。坊主は火の中に入るが、そのまま焼け死んでしまった。仏たちは二三千匹の古狸の正体を現して笑い、山に逃げていった。これは、狸が仏に化けて坊主に仇を返したのである。

『太平百物語』二の十七「栄六娘を殺して出家せし事」の冒頭と結末

○狸を脅して仕返しを受けるといふ話型が『曾呂里物語』『諸国百物語』と類似する。

『日本昔話大成』二七五A「山伏狐」

北串の諏訪池付近で、山伏が昼寝をする古狸を法螺貝を鳴らして驚かすと、狸は逃げた。いつの間にか日暮れ、向こうから葬式の行列が来たので、山伏は松の木に登って避けようとした。ところが行列は松の木の下で止まり葬式を行い、根元を掘って棺を埋め、去っていった。すると、棺の中から死人が這い出して木に登り、逃げる山伏の足を掴もうとする。堪えきれずに山伏は法螺貝を吹き鳴らし、気がつくとも百姓たちが山伏の様子を面白がって見物していた。これは、山伏に脅かされた狸がだましたということである。

『日本昔話大成』二七七「葬式の使い」

男が猪を懲らしめようと火葬場に行く。男の登った松の木の下で葬式があり、その後死体が棺から出てきて松の木に登ってきた。男が刀で突き刺す

と、それは大猪であった。

巻二の一「信心ふかければかならず利生ある事」

興福寺の律師が、春日山麓のしやの地藏堂に日々参詣していた。ある日、夕暮れに参る途中、一人の稚児に誘われて庵で一夜を共にする。暁に見ると、稚児も家中の者も鬼であった。そこへどこからともなく律師の飼犬が現れ、その導きで外へ出ることができた。律師は犬を愛で、首に念珠をかけて放つ。その後律師が地藏堂に参ると、本尊にその念珠が掛かっていた。さては、道で稚児に迷って以降の出来事は、地藏が律師の道心の真諦を示したものと悟り、律師はいよいよ信仰したという。

巻二の二「老女を獵師が射たる事」

伊賀国南張より辰巳あたりに山里あり、その人々が夜な夜な行方不明になる。その村の獵師がある夜山に入ると、奥から百歳にもなろうかと思われる老女が凄まじい様子で現れたので、獵師が弓で射ると老女は逃げ失せた。翌朝、山道に血痕があったので辿ってみると、わが里の庄屋の小家の中へ入っていた。庄屋にこのことを語ると、庄屋は、この家に住む母が、夕べから風邪の心地といって呻いているという。不審に思い、中に入ろうとすると、雷電のような音が鳴り響き、母は家の外へ抜け出した。例の矢は食い折って軒に差してあった。母の居た場所には夥しい血の跡が、床下には山のような人骨があった。そこで、里人が山へ入ると、深山の奥の大きな洞穴に大きな古狸が胸板を射抜かれて死んでいた。この狸が庄屋の母を食い殺して成り代わっていたのだった。

『今昔物語集』二七七「獵師母成鬼擬噉子語第二十三」

獵師の兄弟が、待ちという方法で鹿を獲っていた。九月下旬の暗い夜、木の上にいる兄の髻を、何物かの瘦せ衰えた手が引き上げた。弟がその手を射切り、家に戻ると、老母の呻き声がする。不審に思い、兄弟が鬼の手を確かめると、それは母の手に似ていた。母の部屋の戸を開けると、母が起き上がり、息子たちに掴みかかったので、兄弟は手を投げ入れてその場から去った。その後、母は間もなく死に、その片手は射切られて無かった。

そういうわけで、老母が鬼になって子を食おうと山へ付いていったのだ。兄弟は母を葬った。

△新編日本古典文学全集『今昔物語』四「出典・関連資料一覧」二〇〇二年、小学館▽

『曾呂里物語』三の五「ねこまたの事」△岡▽

『伽婢子』(十三卷十三冊、浅井了意著、寛文六年刊)九の五「人鬼」

丹波国野々口に住む与次の祖母、百六十余歳の時に尼となる。若い時より放逸無慚の者で、孫の与次を時に叱りつけていたが、与次は祖母に孝を尽くしていた。祖母は目耳健やかで、九十歳で歯が抜け落ちたが百歳になってまた生えた。人々は祖母を尊んだが、夜になると家を出るので、孫子が怪しんで跡をつけると、祖母は怒鳴りつけ、飛ぶように走り去る。ある時、家族に部屋を見ると、昼出て夜更けても帰らないので、酒に酔った与次の末子が密かに部屋を見ると、垣の下に犬や鶏、幼子や人の夥しい死骸が積まれていた。祖母が帰り、大いに怒って恐ろしい形相となり、走り去った。後に大江山のあたりで樵夫が、杖を突いて飛ぶように山頂に登り、猪を押し伏せた姥を見、恐ろしくて逃げ帰ったという。祖母は生きながら鬼になったにちがいない。

『諸国百物語』三の十八「伊賀の国名張にて狸老母にばけし事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』二の二と同話。両話にある「なんばり」「名張なはり」は、現在の

三重県名張市。

『宿直草』(五卷五冊、延宝五年刊)四の一「ねこまたといふ事」△岡▽

摂州萩谷の安田某、のたまちという狩を好む。ある夜更けに母がわが名を呼びながら来る。怪しみ、思い切つて矢を放つと、母は大声をあげて帰った。血の跡を辿っていくと、わが屋敷の隠居所の門口まであった。内には母が恙なくおり、なお血の伝う簀の子の縁下を見ると、母の可愛がる虎毛の猫が死んでいた。これは猫股だろうか。死んだのが猫であったのはこの男の幸運である。

『因幡怪談集』(写本、寛延二年頃成)「石河又太夫、猫またを半弓にて殺す事」

○ 当話は、『宿直草』四の一と類似している。

卷二の三「おんねんふかき物の魂まよひありく事」

会津若松のいよという者の家に不思議な事が起きる。酉の刻に、家を地震のように揺らす。次の日の同刻に、家の裏口を叩いて「初花、く」と呼ぶ。主の女房が叱ると、別の右の戸から入ろうとする。それは、白い肌着に黒い衣の色白く髪を捌けた女で、女房が御被い箱を投げると消える。三日目の申の刻には、その女が台所の大釜で火を焚き、家人が騒ぐと消える。四日目の晩、隣の女房が、垣根に立って内を覗いている女を咎めると、「お前の所へは行かないので黙っていよ」と言つて消える。五日目、台所の庭を打杵でとんとんと打つて廻る。家人が祈祷すると、次の日は来なくなつたが、家人が安心しているところに、虚空から「五度だけではすまないでしょう」と声がする。その夜、寝屋の蠟燭を吹き消して女房を気絶させる。七日目の夜、夫婦の寝屋に入り、夫婦の頭を寄せ、また布団をまくつて夫婦の足を冷たい手で撫でたので、夫婦は正気を失つてしまったという。

『諸国百物語』一の四「松浦伊予が家にはけ物すむ事」

○『曾呂里物語』二の三と同話、『曾呂里物語』では「いよ」、『諸国百物語』では「松浦伊予」という人の家での出来事。

卷二の四「あしたか蜘蛛の変化の事」

山里に住む者が夕月夜に憩っていると、大きな栗の木の股に六十余りの老女がいて男に笑いかけた。男は驚いて家に戻るが、老女の姿が忘れられず、眠れずにいるところへ、月影に再びその老女が現れ、内に入ってきたので、男は刀で胴中を斬ると、化物は弱り、男も正気を失つた。その後、かけつけた人々の介抱で男は回復した。男は、大蜘蛛の足を斬り散らしていたのであった。

『諸国百物語』一の十六「栗田源八ばけ物を切る事」△小澤▽

○『曾呂里物語』二の四と同話。ただし備後国鱈の栗田源八郎という者の話となり、『曾呂里物語』最後の、大蜘蛛の足を斬り散らしていた、という部分はない。

『宿直草』二の三「百物がたりして蜘蛛の足をさる事」△頼原・岡▽

若者が百物語をし、九十九話の時に天井から大きな手が差し出されたので、

抜き打ちにしたところ、蜘蛛の足を三寸ほど斬ったのであった。

『新御伽婢子』二の二「古蛛怪異」

○ 夜、大木から女が現れ男に近づくが、男によって殺され蜘蛛の正体を現すという点が『曾呂里物語』の話と類似する。

卷二の五「行のたつしたる僧には必しるし有事」

ある修行僧が武蔵野国の野で一夜を明かすところへ、笛の音が聞え、十六歳ほどの稚児が現れる。僧は不審に思いつつ、立派な屋敷へと案内される。稚児は僧をもてなし、臥所へ入る。僧が経を唱えていると、夜明けに大勢の人が来て僧を捕らえようとするので、僧が事情を説明すると、人々は涙を流し、それは、この春に亡くなった若君で、若君が好んだ漢竹の横笛と茶の具を仏前に供えていたと語る。人々は僧に若君の追善を願い、僧はその後帰国した。

『三国伝記』十二の十五「芸州西条下向僧逢児霊事」八花田▽

鎌倉建長寺の弟子僧が修行のため九州に下向する途中、安芸国西条で、山里の立派な堂に宿る。夜に、田中の城から横笛の音が近づき、十六歳ほどの優美な稚児が現れ、僧と語り、城へと案内する。持仏堂のような所で、稚児の師匠と幸熊丸という小童のために供えられたという品々を僧と共に食べ、その後、僧と共寝する。夜明け、稚児は急に起き上がり太刀を抜いて走り去る。僧が驚きながら居ると、そこへ家主が人々を連れて来て僧を詮議する。僧が事情を語ると、家主は、それはわが子の幸熊丸だという。霊供は、僧の食べた分だけが無くなっており、人々は涙を流した。幸熊丸は師匠が敵人に殺された時に共に討死したという。家主とその妻は嘆き悲しみ、財を投じて寺を立て、僧を開山とし、夫婦ともに出家して菩提を弔った。その後僧は中国で九年を送り、帰国したという。

『伽婢子』八の四「幽霊出て僧にまみゆ」八頼原、今野1・2、花田▽

ある順礼僧が河内国門間庄の村里で田の畔で休んでいると、笛の音が近づき、十四五歳ほどの美少年が現れる。少年は僧を家に案内し、持仏堂の霊供を僧とともに食べる。少年は、嶽山で討死した隅屋藤九郎の息子の藤四郎と名乗り、僧に亡き跡を弔い、過去帳に名を記すよう願う。僧が躊躇っ

ていると、少年の様子が変わり、苦しいな息をつき、太刀を取って外に出、姿を消した。僧は驚きながら夜を明かすと、藤九郎の後家や一族が僧を見つけ、詮議する。僧が事情を語ると、後家は、藤四郎の亡魂が現れたかと嘆く。霊供は僧が食べた分だけが無くなっていった。後家は、藤四郎はさる百日前に都御霊の馬場にて討死したと語り、嘆きのあまりに出家し、菩提を弔ったという。

○ 今野達氏は、『曾呂里物語』や『伽婢子』の当話について、大陸よりの伝来譚「咽う骸骨」「枯骨報恩」の東アジア的一形態が日本において多様に変貌しつつ拡散したものと位置づけている(今野1▽)。また『三国伝記』当話と『幻夢物語』との影響関係については、後藤丹治氏、西沢正二氏に指摘がある。後藤氏は、『曾呂里物語』当話は、文章の比較上、『幻夢物語』よりは『三国物語』に拠ったのではないかと指摘する。

『諸国百物語』一の十二「下野の国にて修行者亡霊にあひし事」八太刀川・江本▽
○ 『曾呂里物語』二の五と同話。

卷二の六「しやうぎたふしの事」

関東のある侍が主命に背き、とうがん寺で切腹したのを、葬礼の用意をして、死人を棺に入れて客殿に置き、坊主十人ほどで番をしていた。夜更け、坊主たちが居眠りしていると、棺が振動し、死人が出てきて、紙燭に火をつけて土器の油を舐め、上座から順番に坊主の鼻へ紙燭を入れて舐め、起きていた二人の坊主が恐ろしさに庫裏へ倒れこみ、人々が駆けつけると、幽霊は消え、何事もなかったようだった。坊主たちは将棋倒しのように気絶して、介抱の甲斐もなくそのまま亡くなってしまった。

『奇異雑談集』(二卷二冊、近世初期成立)四の二「下総の国にて、死人棺より出て霊供の飯をつかみくひて又棺に入。是よみがへるにあらざる事」

行脚僧が下総国の山中にて日暮れ、ある小家に宿す。家主が語るには、親が亡くなったために他所の寺へ僧を呼ぼうとしているが、使いが帰らないため、僧に引導を頼みたいという。亡骸は棺に入れ、縄をかけずにある。僧が一人で端の間で休んでいると、死人が棺を開けて起き上がり、帽子を脱ぎ捨て、僧を見ると棺から出る。僧はもし襲われた時には人を呼ぼうと

静かにしていると、死人はまた僧を見て、供え物の飯を右手で掴んで喰らい、棺に入り帽子を被り棺の蓋を閉めた。僧はこの時に内衆を呼び、事を告げると、内衆は死人が生き返ったかと喜んだが、右手に沢山の飯粒を付けて死んでいた。人々は驚き、僧の我慢強さを称えた。

『諸国百物語』二の四「仙台にて侍の死霊の事」△小澤▽

○『曾呂里物語』二の六と同話。両話にある「東岸寺」^{とうがんと}については不明。

『善悪因果集』（五卷五冊、宝永八年刊、蓮盛著）一「愛執によりて屍の人を殺す事」

西国にある師の寺の十二人の僧たちが、武士の死を弔うために、棺の前で勤行をする。夜更け、皆が居眠りをしてしていると、棺が開き死人が出てきて、和尚以外の衆僧の鼻の先をかき歩く。また奥の間に入り、若い女の首を持ってくる。その後棺に入って首を持ちながら真直ぐに立つ様は夜叉羅刹のようである。そこへ死人の息子や大勢の侍が追ってきて、眠っている和尚や僧たちを罵り起こすが、僧たちは精気を吸い取られ気絶している。息子が死人を諫めると、死人は首を投げ捨てて倒れた。これは、死人の武士が息子の妻に恋慕したが断られ、煩い死んだが、恨みが悪気となって女を殺したのである。

卷二の七「天狗はなつまみの事」

三河国のどうしんという坊主は怖いもの知らずの者である。平岡の奥の古宮の社僧であったが、人々に齋非時を乞うていた。ある時道端で死人があり、坊主が腹を踏んで通ると、死人は坊主の衣の裾を銜えて引き止めた。坊主がなお腹を押さえると離した。踏むと口を開き、足を上げると銜える（無刊記版。寛文三年版では足を上げると離す、とある）。その後、坊主は寺の門前の大木に死人を縛り付けた。夜更け、死人がどうしんの名を呼び、自ら縄を解いて寺に入ってきた。坊主が右腕を斬り落とすと、死人は消えた。夜明けに参詣の老女が訪れ、坊主が出来事を話すと、老女は斬った腕を見たいと所望し、自分の腕だといって体に差し接いで帰り、あたりは再び暗闇となった。後に、本当の老女が訪れて坊主を介抱したが、その後坊主は臆病者になってしまった。これは、坊主の高慢の鼻を天狗がつまんだ

のだ。

『諸国百物語』一の三「河内の国蘭峠道珍天狗に鼻はぢかる、事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』二の七と同話。ただし、『曾呂里物語』では三河国平岡の奥の宮とあるのを、『諸国百物語』では「河内国くらがり峠」（現在の東大阪市生駒山頂南西方にある峠。大和・河内の境で、奈良街道が通る）の山奥の宮とする。また、『諸国百物語』では、道珍が死人と遭遇するのは、今口という場所（不明）であり、道珍の寺を訪れたのは老女ではなく母である。

『宿直草』二の六「をんなは天性きもふとき事」△頼原・岡▽

津の国富田庄の女が郡を越えて男のもとへ忍び通う。ある時、西河原の宮の溝に死人が横たわっているのを、女が橋にして渡ると、死人が着物の裾を銜えた。女が踏むと銜え、足を上げると口を開ける。死人に心はないと納得し、男にこのことを話すと男は驚いて女に会わなくなってしまった。

○堤氏は、『曾呂里物語』の当話は、慢気のを罰する天狗の災いといった伝説的な民談の枠組みを出ていないのに対し、『宿直草』には、類型的な闇夜の死骸譚を世俗の情話に換置することにより、通う女の怖いほどの愛執を浮き彫りにした点に新しさがあると指摘する。△堤4、第三部第三章 I V

『檠下雑談』（五卷五冊、宝暦五年刊、陳珍齋著）一「女子有勇」

○近藤瑞木氏は、『檠下雑談』の特徴として、巷談、笑話、先行怪異小説（『宿直草』等）の焼き直しなどがあると指摘する。勇力の女おさんが角上山で女の死体を踏みつけると着物の裾を口で銜えられたという『宿直草』に基づく話。

『勸化西院河原口号伝』（五卷五冊、宝暦十一年刊、章瑞編）二の四「林女西院河に死骸を試む」△堤2▽

○堤氏は、『口号伝』は『宿直草』に拠ったもので、宝暦明和期の唱導界において、説法談義の文芸的素材は、身近な近世初頭の小説類まで及んでいたと指摘する。△堤2、第一部第三章▽。

卷二の八「越前の国白鬼女のゆらいの事」

越前国平泉寺の新発意が都巡りの際、かいづのうらの宿で女旅人に恋慕さ

れ恋仲になる。夜明けると、女は老巫女で、新発意を追って来るので、困って密かに宿を出るが、ひやきちという所で女は追いつき、木の穴にいた新発意を見つける。仕方なく女を連れて行くが、船から女を突き落とし、寺に戻って休んでいた。師匠の坊主が新発意の部屋を訪ねると、白い大蛇となった女が寝ている新発意を襲うが、家伝の吉光の脇差がひとりで大蛇を追い払う。これを見た師匠は刀が欲しくなり、自分の黄金作の刀とすり換えると、大蛇は易々と新発意を殺した。それより、そこを白鬼女というのである。

『奇異雑談集』二の一「戸津坂本にて女人僧を逐て共に瀬田の橋に身をなげ大蛇になりし事」

曹洞宗の四十あまりの知識僧、坂本戸津にて法談をする。多くの地下衆のなかに、三十あまりの婦人が毎日熱心に信仰するが、僧との内々の交流が度を過ぎていた。人々の噂となって僧は迷惑し、疎遠にしようとしたが婦人は承知せず、ある時婦人が来なかった時に立出ると、婦人が僧を訪ね来る。婦人は僧を見つけて走り出す。裸足になり、帯は切れ、帷子も靡き、髪を乱して駆ける。やがて浜に出ると、人々は驚き恐れる。僧はなお一目散に逃げると、大津、粟津、松本を過ぎ、瀬田の橋へ行き、水中に飛び込むと、婦人も飛び込んだ。瀬田の水練者が飛び込んで水底を見ると、婦人が大蛇となって僧に巻きついていて、人々はそれをみて逃げ帰ったという。

『諸国百物語』一の一三「越前の国永平寺の新発意が事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』二の八と同話、ただし美僧は『曾呂里物語』では「かいづのうら」（現在の滋賀県高島市マキノ町海津か）、『諸国百物語』では「かい河のうら」に宿り、また「平泉寺」（現在の福井県勝山市平泉町）は、「永平寺」（福井県吉田郡永平寺町）の僧である。また、女が美僧に追いついたのは、『曾呂里物語』では「ひやきち」、『諸国百物語』「しらきちよ」（福井県を流れる日野川の中下流の白鬼女川）という場所。堤氏は、『曾呂里物語』等の話が『越前国名蹟考』等に見られる龍泉寺ゆかりの鬼女得脱譚、白鬼女伝承に基づく指摘する。△堤3、第一章Ⅱ▽

『新御伽婢子』四の八「名剣退蛇」

○話は異なるが、大蛇に襲われるが名刀の威力で難を逃れるという趣向にお

いて、『曾呂里物語』当話と一致する。

卷三の一「いか成化生の物も名作の物にはおそるゝ事」

田舎へ下るある座頭が山里で行き暮れ、辻堂に泊まる。夜半ほどに女が現れ、宿を貸そうというのを座頭が断ると、女は赤子を預けたいと言う。弟子が座頭の怒りをよそに赤子を受け取ると、赤子はたちまち大きくなり、弟子を食い殺した。そこへ女が戻り、赤子に、何故座頭を食べないのかと問うと、赤子はどうしても座頭に近づけないと答える。座頭は家伝の三条の小鍛冶宗近を琵琶箱より取り出し、四方を斬りまわると、女は消えた。次の日、道中で女が現れて宿を貸し、座頭の脇差を見たがるが、座頭が断ると、あたりから座頭を脅す多くの声があったので、座頭が刀を振り回し戦ううちに夜が明けた。あたりを見ると、僧はもとの辻堂にただ一人居たのであった。座頭は辛うじて命を助かり、このことを語ったということだ。

『今昔物語集』二一七「頼光郎等平季武、値産女語第四十三」

源頼光が美濃守だった時、渡という場所に産女がいるという噂を聞いた平季武が、賭けをして川を渡ろうということになった。九月下旬のこと、季武は川を渡り、引き返して戻ってきた。三人の若者が岸の薄の中に隠れて季武の動向を確かめていたが、その時、川中に女の声で季武に「これを抱け」という声と赤子の泣き声が聞こえ、生臭い香が漂ってきたので、皆ひたすら恐れた。季武は女から赤子を受け取ると、女が返せというのも聞かず、そのまま陸に上がり、屋敷に戻った。季武が袖を開くと、持ってきたのは赤子ではなく木の葉であった。その後、若者たちが川での怪異を語ると、行かなかった者も恐ろしかった。季武は賭け物を受け取らなかつたので、皆はこれを称えた。産女は、狐が人を化かしたのだという者もあり、産で死んだ女の霊だということである。

『諸国百物語』一の二「座頭旅にてはげ物にあひし事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』三の一と同話。

『諸国百物語』四の六「丹波申楽へんげの物につかまれし事」△小澤▽

○『曾呂里物語』三の一の最後の部分、男が持っている脇差のために化物の女が「近寄れない」と言うのと、虚空から大声が聞こえるという趣向が類似

する。

『諸国百物語』四の十一「浅間の社のばけ物の事」

信濃国のある侍が、化物の出るといふ浅間社に夜肝試しに行く。すると若い美女が現れ、女が抱いていた子どもが侍に抱きつく。侍が棒で打つと去り、また寄ってくる。こと数度に及び、侍が刀で斬ると斬るだけ子の数が増え、侍に近寄る。女も鬼となって襲い来るのを、侍は三刀刺すが、氣を失う。そこへ家来が駆けつけ、見ると、侍は脇差を逆手に持って塔の九輪を突き通しており、化物は消えていた。

『宿直草』二の一「急なる時も思案あるべき事」△岡▽

青侍が林中の古宮の拝殿で夜を明かしていると、夜更け、女が幼児を抱いて現れ、父に抱かれよといつて幼児を侍に突き出した。侍が何度も寄ってくる幼児を睨み退けていると、女が寄ってきたので、抜き打ちに斬ると、女は叫んで天井に上った。夜明けに侍が天井を見ると、女郎蜘蛛が斬られて死んでいた。また人の死骸が山積みになり、幼児と思つたのは五輪であった。これを斬っていたら刃も折れ、侍の命はなかつたであろう。

『宿直草』二の四「甲州の辻堂にばけものある事」△岡▽

○ 岡氏は、化物が、銘刀があるのであの男は喰えないという話が類似すると指摘。

『太平百物語』一の九「経文の功力にて化者の難遁れし事」

○ 人家はなれた山中の家に泊まる僧が、人を食う鬼女と子に襲われそうになるが、経文の功力で逃れるという話。

卷三の二「りこんといふ煩の事」

出羽国守護何某の妻女が雪隠に行き、しばらくして部屋に帰って床についた。しかし、しばらくするとまた女の声が出て部屋の戸を開けて内に入った。何某は不思議に思い、同じ姿形の二人の女を詮索したが分からない。ある者が、一人の女が不審だといふので、詮索後、首を刎ねると、それは人間であった。それではもう一人が化物だと首を刎ねると、それも人間であった。死骸を数日置いたが変化はなかった。ある人が、それは離婚という病気だと語った。

『諸国百物語』一の十一「出羽の国杉山兵部が妻かげの煩の事」△太刀川▽

○ 『曾呂里物語』三の二と同話。ただし『諸国百物語』では侍の名を「杉山兵部」とする。また、最初に一人を斬つたのは、変化の物は両手が丸いという理由からとする。

『今昔物語集』二二十七「狐、変人妻形来家語第三十九」

京の雑役をする男の妻が、夕暮れに大路に出かけて帰って来ないので、夫が不審に思っていると帰ってきた。しばらくするとまた同じ顔の妻が帰ってきた。狐の仕業だろうと思ひ、夫が斬ろうとすると、どちらの妻も泣いて否定する。悩んだ末に、先に来た妻が怪しいのでこれを捕らえると、臭い尿を掛けて狐となり逃げていった。男は悔しがったという。このような場合には心を沈めて考えるべきだ。本当の妻を殺さなかったのは運がよかったと人が語ったということだ。

○ この話は、二人の妻が夫の前に現れたので夫が斬る、という話において、『曾呂里物語』と類似している。ただし、ここでは狐の仕業となっており、結果として妻は無事だったという点において『曾呂里物語』と相違する。狐が妻に化けて二人となり、殺されそうになるという話は、次の『本朝故事因縁集』にもある。

『本朝故事因縁集』四の八十七「四国狐不住由来」

享祿年中、前河野通直の妻女が二人になり、争う。医師や禅僧が離魂病として処置をするが治らない。通直は二人を捕らえて閉じ込め、数日すると、一人の女が異なった食事の仕方をしたので、これを拷問すると狐となった。これを殺そうとすると、四国中の狐が僧俗男女となって四五千人集まり、助命を願う。狐は、日本国の狐の王、貴狐明神の末、稻荷の使者の長狐という物で、殺すと国に大災があるという。通道は不憫に思い、長狐を助ける代わりに、全ての狐が中国へ去るよう誓詞を書かせ、狐らを追放した。そういうわけで、四国には狐がないのである。

卷三の三「れんだい野にてばけものにあふ事」

都蓮台野に、夜な夜な燃える墓と、「こいや〜」という声をたてる墓がある。ある雨の夜に、若者が様子を見に行くと、例の声が聞こえて墓の中

から女が現れ、若者に、あそこの燃える墓まで背負って連れて行って欲しいと願う。若者が恐ろしく思いながら女を連れて行くと、女は燃える墓の中に入る。墓がしばらく鳴動した後、女は鬼神の姿になって再び現れ、若者に背負って戻れという。戻った女は墓の中からもとの姿になって現れ、若者にお礼を述べ、何やら重い物の入った小袋を与えた。若者はそのまま帰り、仲間からは褒められたが、その袋には何が入っていたのか、知りたいたいものだ。

平仮名本『因果物語』一の一「隣姫ふかき女、死して墳の焼たる事」△堤2▽

○嫉妬深い女の墓の上に穴が出来て火が燃えるという話。堤氏は、本話を鎮火譚の類型話とする。△堤2、第三部第一章▽

『諸国百物語』一の七「蓮台野二つ塚はけ物の事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』三の三と同話、ただし『諸国百物語』では、女が男に与えた物は金子百両であったと具体的に述べている。

『諸国百物語』三の七「まよひの物二月堂の牛王をせし事」△小澤▽

○冒頭に、墓が一夜に三度燃え、女の声で「人こひしや／＼」という声がある。若者三人が肝試しに行くという話が『曾呂里物語』三の三と類似する。

卷三の四「色好みなる男みぬ恋に手をとる事」

京から北陸道へ下る商人が、ある宿で、隣の部屋で優雅に小唄を歌う女に心魅かれ、恋仲となり夫婦の誓いをするが、夜明けて見ると浅ましい瞽女であったので、男はそのまま宿を出て上方へ向かう。女が追いかけてくるのを、男は馬方に頼んで大河につき落とさせる。しかしその後、女は男の宿へ押し入り、男の隠れる土蔵へ入る。土蔵がしばらく震動して亭主は恐ろしく近づけず、夜明けてみると、男は八つ裂きにされ、首はなくなっていた。

『諸国百物語』二の一「遠江の国見付の宿御前の執心の事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』と同話。ただし、商人は京から関東へ下る者であり、泊まったのは遠江国見付の宿（現在の静岡県磐田市中心部）、女が突き落とされたのは天竜川である。

卷三の五「ねこまたの事」

ある男が、ぬたまちちといって山から鹿が下るのを庵で待っていると、女房が訪れたので男は不審に思い、矢を放つと女房は消えた。男が家に戻ると、門口に血が夥しく流れていたが、女房は家で無事であった。血の跡を辿っていくと、飼っていた古猫が死んでいた。それで、猫は長く飼わなくなった。

『曾呂里物語』二の二「老女を獵師が射たる事」△岡▽

『宿直草』四の一「ねこまたといふ事」△岡▽

『因幡怪談集』「石河又太夫、猫またを半弓にて殺す事」

卷三の六「おんじやくの事」

信濃国すゑきの観音堂で、愚かな若者が肝試しで一夜を明かしていると、夜半過ぎに琵琶箱を持った座頭が来る。互いに名乗り合い、若者が平家を所望し座頭は数曲を語る。すると琵琶の転手が軋んだので、座頭は温石を糸に塗る。若者が興味を持って温石を受け取ると、両手にくっついて離れなくなる。そのうち手が板敷に付いて動かなくなると、座頭は一丈ほどの高さの恐ろしい鬼となり、若者を鬪り威して後、消えた。若者がようやく温石を離して悔しがっていると、大勢の仲間が様子を見に訪れる。若者が事情を語ると、皆手を打って笑う。見ると、仲間と思っただけは皆例の化物であったので、若者は気絶する。夜明けに本当の仲間が尋ねてきたが、若者は正体も無く、後に本性を取り戻して語ったということだ。

『諸国百物語』三の一「伊賀の国にて天狗座頭にばけたる事」△小澤▽

○『曾呂里物語』と同話。ただし、『曾呂里物語』で信濃国すゑきの観音（不明）とあったのを、伊賀国の里から遠い山の堂とする。また『諸国百物語』では新たに、座頭が若者の三刀を持ち去り、後にそれが杉の木の枝にかけられていたという話と、若者が傲慢ゆえに天狗が災いをなしたのだという評を加えている。

『諸国百物語』五の四「播州姫路の城ばけ物の事」△小澤▽

○城主秀勝が天守にいと、訪れた座頭から琴の爪箱を渡され、それが両手両足について離れなくなる。座頭は城の主と名のり鬼神となり、秀勝を脅

す、という場面が『曾呂里物語』三の六と類似する。

『宿直草』二の二「くも人をとる事」△岡▽

ある人が早朝宮参りの折、拝殿の天井に大きな土蜘蛛がいて、糸で人を巻いて首筋に食い付いているのを見つけた。襲われた人に事情を聞くと、次のように語った。旅で一夜を明かしていた時、座頭が現れ、身の上を語り合う。その後、座頭は香箱から優美な物を取り出したので受け取ると、それが両手両足から離れなくなった。座頭は蜘蛛の正体を現し、旅人を襲い、血を吸われていたところを救われたのだと語った。

『宿直草』一の三「武州浅草にばけ物ある事」△瀬原・岡▽

浅草の観音堂に化物が出るということで、江戸の鷹匠の一人が肝試しに出かけた。堂で世を明かす男の前に、様々な化生の者が現れる。夜明け、男が迎えを待っていると馬を牽いて下男が訪れる。男が夜の出来事を語ると、下男も馬も化物で、男は乗った馬から落ちてしまった。やがて本堂の迎えが来て、男を介抱した。その後、後の評判が悪く男は行方不明となったという。

○『宿直草』一の三は、化け物が肝試しをしに来た男をなぶり脅すという筋では『曾呂里物語』と同じであるが、座頭が実は化物であり、座頭から渡された物が手足に付いて離れなくなるという筋はなく、その点で『宿直草』二の二の方が『曾呂里物語』に類似している。

『日本昔話大成』二六九「蜘蛛女」

社頭に座頭の化物が出て琵琶を弾く。若者が退治に行き、おもしろいことを聞かせてくれというが、座頭は琵琶を弾くだけ。糸が切れたので若者がつないでやると、指先や口や足にからまってついに空中に引き上げられる。朋輩が来て助ける。座頭の化け物の正体がわかり退治する(新潟県見附市)。侍が古寺の化物退治に行き、夜中に座頭が訪れ、かい餅を出して侍に与える。頭とかい餅を持った手が付き、両手両足が額に付く。座頭は侍を連れ去る。再び侍が化物退治に出かけ、座頭がかい餅を与えるのを断り、投げつけられた餅を刀で切りつけると、座頭は音を立てて退散する。翌朝、村人と血の跡を辿ると、本堂の仏像の下に、大蜘蛛の死体と多くの人骨があった(新潟県見附市)。

卷三の七「山居の事」

京東山鳥辺野の僧のもとへ、俗人だった頃の友人が訪れ、親しく語らう。夜更けに、どこからともなく「今宵誰それが亡くなったので、約束のとおりいらっしゃって埋葬なさってください」と声がする。僧は、「今夜は客人ゆえ参上できない」と断るが、その者が強く求めるので、僧は客人に、「どんなに恐ろしいことがあっても黙っているように」と言って出て行った。客人が一人凄まじい気持ちで待っていると、寅の刻頃、どこからともなく光が家に入り、また鬼形の者が僧の闇に入り、物を食う音がして、やがて消え去った。客人はやや正気に戻り、僧の部屋をうかがうと、人の死骸が積んであった。夜明けに戻った僧に、客人は昨晩の出来事を語ったが、僧は何事も無い風であった。思えば、僧は人を食い習い、その罪のために鬼となったのだろう。

○堤氏は、食人鬼説話として以下の『緇白往生伝』『善悪因縁集』や片仮名本『因果物語』下の十七等をあげ、『曾呂里物語』結末について、鬼の正体を僧の悪念と断ずるのみで、罪障深い者の発心機縁を主要モチーフにする唱導説話の基本的立場が無化され、全般に奇談文芸特有の筆風を漂わせていると指摘。△堤3、第一部第二章I▽

『緇白往生伝』(三卷三冊、了智者、元禄元年序)卷中「信譽上人」△堤3▽

上人信譽が上洛して借りた宿の妻が、その日に亡くなったという。亭主は葬送のために隣村の僧を呼びに出かけ、その間に上人は死者を弔っていた。やがて隣村から一人の僧が先に来て、死骸を舐めはじめたので、上人が奇怪に思っていると、そこへ亭主が僧を連れて帰宅した。上人がよく見ると、それは先ほど死骸を舐めていた僧であった。上人は、先に来た僧がこの僧の強盛な貪念の化したものと悟り、密かに僧を呼んで事の次第を語ると、僧は深く慙愧の心を起こし、上人に懺悔した。その後上人はいよいよ道心を増したという。僧は上人を隠遁の門に入らしめるべき善知識であった(10オウ)。

『善悪因縁集』五「無慚の僧屍を食ふ事」△堤3▽

関東のある禅寺の法師が、死んだ老婆の供養のため檀家に呼ばれる。その前夜の法師の夢に、怪しげな者が法師を強引に野原へ連れ行き、老婆の死

骸を食べさせる。夜が明けても心地悪しく、もう一人の僧がこの法師の様子を見ると、口や胸まわりが血に染まっている。法師は僧に夢の話をし、僧が廟所をうかがうと、食い荒らされた老婆の死骸があった。法師は寺にいるのも恥ずかしく、またもう一人の僧もこの縁で発心厭離したのだからか、二人ともに出奔したという。これは、法師に齋非時を貪る心が深かったせいであろう。

巻四の一「声よきものをば龍宮よりほしがる事」

尾張国熱田宮に、謡を好んで夜昼ともなく謡う者がいた。海上に亭を造り、夜更け過ぎまで謡っていると、海上二町ほど沖から大声で「いやいや」と称えた。この声はその者の耳に入り、耐え難い心地がし、そのまま病に伏し、心乱れて末期に及ぼうとした。一門眷属が集まるところに、沖の方が震動し、丈一丈ばかりで目が光り輝き、顔が朱を差したように赤く、眉は漆を塗ったような形相の男が現れて座敷に居直り、「明日必ず迎えに来よう」と言って消えた。翌日人々が武装して夜を明かしていると、子の刻と思われる頃に海上が鳴動し、光を放つて例の化物が現れ、病人を抱いて海中に入った。どうしようもなく、人々は葬礼を行い嘆いていると、翌朝の戌の時あたりに、かの男をずたずたに引き裂き、「欲しければ返そう」と亡骸を座敷へ投げ出した。どのような事情か、弁えかねることである。

『今昔物語集』二十七「近衛舍人、於常陸国山中詠歌死語第四十五」

△新編日本古典文学全集『今昔物語集』四「出典・関連資料一覧」二〇〇二年、小学館▽

歌を素晴らしく巧みに歌う近衛舍人が、相撲の使いに東国へ下る時、陸奥国と常陸国の境にある焼山の関を、馬に乗って眠りながら通っていた。目覚めて心細さに常陸歌を歌っていると、深い山奥から「ああ面白い」といって手をはたと打つ物がいた。舍人は馬を止めて辺りを窺ったが誰の声とも知らず、恐ろしく思いながらそこを通り過ぎた。その後、舍人は心地が悪くなり、その夜の宿で寝たままに死んだ。そういうわけで、深い山中で歌などを歌ってはいけない。山神などが賞賛して引き留めたのであろう。従者たちは浅ましく思い嘆いたが、何とか上京して語ったのを語り伝えた

のである。

巻四の二「御池町のばけ物之事」

京御池町の化物が棲むという家に、愚か者三三人が出かけ、嚴重に戸締りをして夜を明かそうとした。丑の刻頃に裏口で物音がし、何物かが唐臼を踏み鳴らす。それは白い物を着た七尺ばかりの、目鼻口のない坊主で、三人の方へ顔を向けたので、男たちは討つこともできず、息をも立てずにいた。やがて化物は消え、夜明けて見ると、裏口も唐臼も宵のままであった。

巻四の三「狐二たびくる事」

ある所に仕える男の亡くなった妻が、夜な夜な男を訪れる。朋輩が聞きつけて二人が向かい合っているとところに押し入り、男女を捕まえると灯が消えたので、松明を点す。すると女と思ったのは、男の主人の秘蔵の飼猫であった。人々が躊躇うと、猫は「かいかい」と鳴いて藪の中に消えた。さては狐であったかと、人々は頭を掻いたということだ。

巻四の四「万の物年をへては必化事」

伊予国いづしの山寺は、にるといって僧が創立したのだが、何時の時からか化物が棲み、住持の僧たちを捕っていたので、今は主無き寺となっていた。ここに、関東の足柄から僧が訪れ、にるに山寺の住持を無理に願い、山寺に入った。すると夜に「こんかのこねん」「けんやのばとう」「そんけいが三ぞく」「こんさんのきうぼく」という物が訪れ、寺の内から「えんよう坊」が出て、今夜は生魚があると言って客を歓待する。僧は化物の正体を見抜き、化物に名乗りをあげ、金棒で化物を打ち砕くと、いずれも数百年を経て形を変じて現れた物々であった。夜明けてにるとその使いが訪れたが、僧は無事で、夜の出来事を語った。にるは僧を中興開山の智者とし、寺は今でも仏法繁昌の霊地ということである。

○ 出石寺は、現在の愛媛県喜多郡出石山にあった寺。『愛媛の面影』（五卷五冊、慶応三年刊、半井梧庵著）巻四「喜多郡」に「金山出石寺」とある。
『宿直草』一の一「すたれし寺をとりたてし僧の事」△頼原・岡▽

ある知識徳行備えた高僧が、化物が棲んで住職を捕るといふ荒寺を訪れ、仏法再興の志によつて寺を所望する。丑の刻頃に、庫裏から「椿木」が現れ、また外から「東野の野干」「南池の鯉魚」「西竹林の一足の鶏」「北山の古狸」といふ化物が訪れ、僧を様々に威したが、僧が般若心経を一心に念じていると、やがて消えた。夜明けに、五六人の檀那が来て夜の様子を尋ねると、僧は化物の正体を明かし、善行として退治しよう勧める。僧の話した場所に入ってみると、それぞれに狐、鯉、鶏、狸、椿がいたので捕まえ、取り払った。その後、その寺はたいそう繁昌したということである。

○『曾呂里物語』の類話。両話ともに、化物退治によつて寺が再興される結果となるが、『宿直草』では、僧は「只きえなん法灯をかかげたきのみ」と、化物寺へ行くことが仏法繁盛を目指した行為であることを明言しており、唱導的な性格が強調されている。

『一休諸国物語』（五巻、寛文十一年頃刊）四の五「ばけ物の事」

一休が化物寺に泊まっていると、「東野のはつ」「西竹林のけい三ぞく」「南地のりぎよ」といふ化物が現れて歌をうたう。一休は化物の正体を明かし、これを退治する。

『怪談記野狐名玉』（五冊、谷川琴生糸著、明和九年刊）二「上町何某屋敷化生の事」

○ 化け物屋敷に椿木の化物が現れる場面が類似する。

『日本昔話大成』二一〇「化物問答」(A1812) 〆岡〷

旅の侍が、化物が出るという寺に泊まって化物の正体を見届けることになった。夜更けに、「そくへいたん」を尋ねて「東原の馬頭」「西竹林のさいじよつけい」「南海の大魚」「北池の墓」が来たが、侍は追い返した。夜が明けて縁の下を見ると、古下駄の緒の切れたのが片方あったので、それを焼くと、化物は現れなくなった。

○ 岡氏は、「東原の馬頭」「西竹林のさいじよつけい」「南海の大魚」「北池の墓」の名前から、当話が『曾呂里物語』よりは『宿直草』に類似すると指摘。

巻四の五「常くの悪業を死して顕す事」

関東の宇都宮何某の北の方は、やや年長けるまでおちやあという幼名で呼ばせていた。この北の方は不得心者で、慈悲の心なく、召使に辛くあたっていた。死後、亡骸を仏前に置き、一門が集まっていると、棺が動き、死人が凄まじい形相で出てきたので、長老がこれを引導するもとの死体となった。悪心の恐ろしさ、仏教の尊さは、これをもって疑えないことである。

巻四の六「悪縁にあふも善心のすゝめとなる事」

信濃国の守護に仕える何某が、人を殺めたために身重の女房を連れて逐電した。深山の辻堂で休んでいると、夫婦に仕えていた、はるといふ女が尋ねてきた。男は不審ながらも内に入れ、妻に付き添わせていると、はるが眠っている妻の首を舐め回す。驚いて妻が訴えるが、はるの言い訳に男がそのままにしておく、二人の女の姿は消えていた。男が驚いて捜すうちに、山の上や谷の底、峰から声が聞えるが、妻の行方は分からず、夜が明けた。麓の寺の坊主がなお探してみると、妻は大木の上に身体を引き裂かれて掛けられていた。男は自害を止められ、妻の後世を弔ったということである。

○ 今野氏は、『曾呂里物語』当話の原説話が、文禄・慶長の頃よりすでに廻国遊行の徒によつて、京阪地方から北奥の在所まで持ち運ばれていたと指摘。

『今昔物語集』二十七「産女行南山科値鬼逃語第十五」 〆太刀川〷

宮仕えの若い女で、身寄りのない者が、定まった夫もなく懐妊した。この女は賢い女で、ある日密かに女童を連れて家を出、北山科という所の古びた屋敷で出産した。そこに老婆が現れ、女を介抱するので、女はそこへ留まった。二三日後、女が昼寝をしていると、老婆が赤子を美味そうだと言ったので、女は不気味に思い、老婆が寝ている隙に女童と赤子を連れて逃げ出し、賀茂川原のとある小家で衣服を改めた後に屋敷に戻った。これはこの女が年老いてから語った話である。古びた家には鬼のようなものが住んでいるので、一人で行っては行けないと語り伝えられている。

○『今昔物語集』二十七「在原業平中将女被噉鬼語第七」、「東人宿川原院被取妻語第十七」、「宿直草」一の四「浅草の堂にて人を引きさきし事」にも、男女が人気の無い場所に泊まったところ、女が物の怪(鬼)に食われてしまうという話がある。

『伽婢子』十三の七「山中の鬼魅」△頼原・今野2・花田・岡▽

津の国の勇士、小石伊兵衛は、河内国片岡城が危うくなり、身重の妻を連れて大和国へと逐電する。途中で休んでいると、召使の女童が追ってきたので、喜んで頼りにする。妻は出産し、女童は甲斐甲斐しく働く。妻は木下で、赤子は女童が抱き、世を明かしていると、女童が赤子を舐め回し、食い殺す。小石が斬り付けると鬼となって逃げ、さらに妻を捕らえて消える。小石は嘆きつつ山中を探すと、山奥の岩角に妻の首があったので、それを埋葬し、大谷へ行き、発心して高野山新別所で修行した後、行方不明となった。

『諸国百物語』二の十一「熊野にて百姓わが女はうを変化にとられし事」△小澤▽

熊野の百姓が年貢が払えずに妻子を連れて逐電し、ある堂で一夜を明かしていると、女が来て家に誘われ、そこで百姓が木の葉拾いの仕事をして戻ると、女が女房を連れ行く。山上から聞こえる女房の声をしるべに探すが見つからず、夜明けに杉の木の上に切り裂かれた女房の亡骸があった。百姓が嘆いていると、男が来て、脇差をくれたら死骸を下ろそうと言うが、百姓が断ると、男は木に上って女房を喰らい、虚空に消えた。この堂は女人結界の寺ゆえに起きたことだと人は語った。百姓の脇差は三条小鍛冶の名刀ということであった。

『諸国百物語』四の六「丹波申楽へんげの物につかまれし事」

丹波の申楽が妻子弟子二十人ほどを連れて上京の時、山中に宿り、その夜、女房が出産する。夜明けに通りかかった若い女に、申楽が子どもを抱かせる。申楽が目覚めると、女がその子を舐め消している。何者かが二十人ばかりを掴んで虚空へ昇る。申楽一人になると、虚空から男も捕れという声があるが、女は脇差があるので捕まえられないといひ、消えうせる。申楽は驚きつつ、夜が明けると思ふとそれは昼の七つ時分であった。

『宿直草』二の四「甲州の辻堂にばけものある事」△頼原・岡▽

近江の侍に奉公していた者が、主君武田家の衰微に伴い、侍から家宝の刀を渡され、身重の侍の妻を連れて密かに京に上るよう命じられる。道中、奥方に陣痛が始まり、化物が出るというところある茶屋にやむなく一夜の宿を借りる。茶屋の主人も帰宅し、夕刻に奥方は女兒を出産する。夜半に茶屋の娘が訪れ、奥方の世話をするといい、赤子を預かる。男がうとうとしていると、娘が赤子を食うという奥方の声がある。娘は奥方を連れて天井に上がり、やがてそこから数人の物を食べる音がする。また、もう一人の男も連れて来いという声したが、娘の声で、銘刀を持っているので近寄れないという。夜が明けて、やってきた茶屋の主人に事情を語り、天井に上ると多くの人の亡骸があった。男は泣く泣く奥方の亡骸を供養し、主人や縁者の消息も絶えたので、今はこれまでと、遺骨を黒谷の寺に納めて出家し、母子の菩提を弔ったとのことである。

巻四の七「女のまうねんおそろしき事」

近江国さほ山に住む男の妻、妾を憎む。ある時妾は雪隠で大蛇に襲われそうになる。その後、本妻が病で末期に及んだ時、男は妾のところから急いで戻ると、妻は夫を呪い、男の飲ませた水を男の顔に吹きかけ、亡くなる。妻の幽霊はすぐに妾を襲い殺す。男は妾の葬礼をしようと、妻の幽霊が妾の首を手につけて橋に佇んでいた。妻の乳母がこれを嘆き諫めると、妻の姿は消え失せた。妾に十一歳と九歳の男児がいたが、これも三日のうちに亡くなり、男も嘆きのうちに亡くなった。惣領一人残ったが、出家して高野山に入り、父母の後世を弔ったということである。

○「さほ山」は、現在の滋賀県彦根市佐和山町の佐和山のことか。

巻四の八「座頭あたまはり合事」

奥州へちの里の高隆寺に出入りする座頭たちが行方不明となる。ある時、りうばいという逞しい座頭が訪れる。住持は喜び、りうばいに平家を語らせ、伽をさせる。その後、頭を張り合う遊びをすることになり、まず住持が石兜を被ったりうばいを殴ると、りうばいは地に倒れ、しばらく目を回した。そこで住持が化物だと考えたりうばいは、大鉞で力まかせに住持を

討ち殺した。夜明けて見ると、住持は小牛ほどの大きさの猫で、口は裂け、尾は何本もあった。この猫が住持を食って住寺になっていたのだった。

○「へちの里の高隆寺」については不明。

巻四の九「耳きれうんいちが事」

信濃国善光寺の比丘尼寺に、越後国の座頭うん市が出入りしていた。病の後、半年ぶりに寺を訪れ、主の老尼に案内され客殿に宿をとる。そこへ、三十日程前に亡くなった比丘尼の慶淳が訪れ、うん市を無理に寮に連れて行き、部屋に閉じ込める。慶淳は経師に会いに出ていき、夜明けてうん市を閉じ込めている部屋に戻る。三日目の暁に、飢えたうん市は寮の戸を叩いて寺の者を呼び、事情を語り、慶淳の死を知って興ざめた。寺中の人が集まり百万遍の念仏を称えると、慶淳の霊が現れ、うん市の膝を枕に眠ったので、その隙に人々はうん市を逃がす。うん市がある寺の長老に助けを求めると、長老たちは体中に尊勝陀羅尼を書き付ける。そこへ怨霊が来てうん市を探し回り、陀羅尼の書き足りなかった耳をもぎ取って帰った。うん市は逃れ、耳切れうん市と呼ばれ老いるまで越後国にいたということだ。

『諸国百物語』一の八「後妻うちの事付法花経の功力」

武蔵国秩父の大山半之丞の妻が産後に死し、後妻を迎えたが、先妻の幽霊が現れるという。諸国行脚の僧は霊を封じようと、半之丞の身体に法華経を書き、先妻の墓前で息を潜めているように命じる。山中の夜、雨の降る五更の頃、先妻の幽霊が女兒を連れて現れ、半之丞の上に腰を掛ける。経文の消えた足を子どもが見つけるが、母は経木だと恐れて立ち去る。先妻の幽霊は女兒を抱いて半之丞の屋敷へ向かい、後妻の首を下げて戻り、半之丞の上に腰を掛けて、女兒に、「父を殺し損ねたが、先妻から受けた仕打ちの仕返しを果たして嬉しい」と語り、塚に入ると、夜は明けた。

『宿直草』一一の十一「こざいしやうの局ゆうれいの事」△頼原・岡▽

団都という座頭が赤間が関の浄土派の寺に宿っていると、女人が座頭を案内し、ある立派な屋敷の上臈の前で小宰相局の曲を語らせる。すると長老の咎める声だったので、団都が迎いをうかがうと、そこは小宰相局の墓前であった。団都が長老に事情を語ると、長老は、局の幽霊から団都の身を

守る為に、その体中に降魔の呪や般若の経文を書いた。日暮れに、女房が来て団都を探し、長老が経文を書き損ねた左の耳を見つけてそれをもち取って去った。以降、人々はこの人を耳なし団都と呼んだ。

○ 当話について、堤氏は、法然の弟子住蓮の法脈にある浄土僧が展開した小宰相局伝承と、壇ノ浦の「耳なし芳一説話」とを合わせ、「小宰相局」の幽霊譚として創作された話とする。△堤6▽

『御伽厚化粧』（五巻五冊、筆天齋作画、享保十九年刊）「赤間関留幽鬼」△頼原・岡▽

『日本昔話大成』二四二「耳切団一」△岡▽

琵琶法師の団一のとこに官女が訪れ宴会を頼む。団一は毎晩行くうちに衰弱する。ある僧が墓場を通ると法師が琵琶を弾いているので、体中に呪いを書く。官女が連れて行くとするが連れていけず、呪いのない耳だけを持っていく。（徳島県板野郡）

○ 広瀬朝光氏は、「耳なし芳一」の近世期における三系譜の一つに『曾呂里物語』当話を置き、それが『雨月物語』「吉備津の釜」から『臥遊奇談』へと継承されたとする。また水野ゆき子氏は、『曾呂里物語』当話が東北、北陸、新潟地方で多く採集される昔話「三枚のお札」を起源とすることを指摘する。

巻四の十一「おそろしくあひなき事」

陸奥の小野寺に化物が棲むという話がある旅人が聞き、宿の亭主が止めるのも聞かずに出かける。夜半に、森から光物が見え、五丈余りの色青く痩せ衰えた男が妻戸から男を見ている。化物はやがて台所へ行き、施錠を壊して奥の間に這入る。男は化物に組み付いたが胸を蹴られ、そのまま気を失った。翌日、人々が様子を見に訪れると、男は正気に返って出来事を語った。二重三重にかけた戸の施錠は夜のままであった。それからいよいよその家には人も住まなくなったという。

『諸国百物語』一一の二「相模の国小野寺村のばけ物の事」△太刀川▽

○ 『曾呂里物語』と同話。ただし、『曾呂里物語』では「みちのく小野寺といふ山寺」、『諸国百物語』では「相模国の小野寺村」（ともに不明）となる。

卷五の一「たつた姫の事」

何某の娘の女房に、ある優雅で諸芸に優れた女を雇う。夜更け、北の方が女の部屋を見ると、女が自分の首をとって鏡台に置き、鐵漿と化粧を付け、首を胴体に戻した。このことを知った主人の命により、北の方が女にさりげなく暇を告げると、女は顔色を変えて北の方に飛び掛る。そこへ様子を窺っていた男が女を斬り殺す。女は年取った猫で、口は耳まで切れ、角が生えていた。その名をたつたびめといったという。

『古今大著聞集』（十二巻、天和四年序、棕梨一雪著）十一「猫、奉公人の女に妖事」

ある旗本の息女の局として抱えた女は、文芸に長け、よく仕えていたが、ある夜、口が耳まで切れて耳を逸らした姿の局が鐵漿を付けているのを主人が見つける。翌朝、主人は局を呼び、暇を取らせようとする、侍女が恐ろしい顔つきに変わったので、抜き打ちにすると、それは大きな古猫であった。その猫が書いた伊勢物語などの草紙が今に伝わるとのことだ。

『諸国百物語』二の七「ちこの国猫またの事」△太刀川▽

○『曾呂里物語』と同話だが、越後国での話となり、話の最後は、北の方もしばらく患ったとある。

『宿直草』四の二「年へしねこはばくる事」△頼原・岡▽

大坂町奉行の島田何某のもとに、ある夜、池田勾当という琵琶法師が訪れ伽をする。人々が寝静まったとき、小座頭が誰かが部屋に入ったと越前殿に告げる。手燭をかざすと、飼い猫がいるだけで何事もなかった。またある時、越前殿が昼の寢覚めに庭を眺めていると、その猫が子どもの衣服を着て立ち、美しい姫となった。越前殿は、小座頭の話が猫の仕業と知り、猫を天満橋から流した。(略)

『新御伽婢子』一の八「遊女猫分食」

○長崎丸山の遊女町に、優美な美少年が女郎左馬の介のもとに通うが、実はそれは古猫であった。人々がその正体を見つけると、猫が凄まじく猛ったので殺したという話。猫が化けたのが手跡や和歌に優れる美人という点で『曾呂里物語』の話に通じている。なお、^①当麻氏は、『新御伽婢子』のこの話を『宿直草』四の二話の類話としてあげている。

卷五の二「夢あらしの事」

都の何某に二人の女あり、昼寝の時に二人の女のうめき声がし、男がうかがい見ると、女の髪の毛が逆立ち、乱れ合っては両方に分かれ、枕元には二匹の小蛇が争っている。その時二人の女が歯ぎしりをしてうめいたので、それを見た男は驚き呆れ果てる。男が座敷へ入ると、蛇はそれぞれ女の胸に上がり消え、女たちもとの姿となる。目を覚ました女たちは汗を流し、男の問いかけに、一人は「夢も見ない」と答え、一人は「不思議なことに人と争ったと思うばかり」という。恐ろしく思った男は女たちに暇をやり、独身で過ごした。女の妄念は恐ろしく、男に勝って罪も深いと昔から伝えられている。

○堤氏は、結末に、関係者の発心譚が欠落し、妬婦の愛欲とその象徴である蛇性の夢中闘争に興味が移行していること等から、当話が乱世の時代を経て信仰伝承から奇談咄に転生した末流の中世蛇髪譚だろうと指摘。△堤2、第二部第一章II、堤5▽

卷五の三「信玄せいきよのいはれの事」

甲斐国の信玄が風邪の心地として医療を加えなざる時、奥の間で昼寝をしていると、白い小袖を着た優雅な女が部屋に入り、信玄の枕上に居寄り、間もなく帰る。傍にいた医師作庵は奥方が見舞いに来たのかと思つたが、目覚めた信玄は驚いて、今の女はすでに亡くなった者だと作庵に語る。それによると、信玄の甥の一丸の親が、死の間際に一丸を信玄の養子にと頼んだのだが、その後争いがあり一丸は討たれてしまった。その恨みを述べ、一丸の母の霊が来て、信玄の手を引き無理に連れて行こうとする時、目が覚めたという。正しく枕元にその女の姿があったことから、病は治るまいと信玄は語った。果たして信玄は逝去なさったと、作庵は語った。

○信玄の死については、それにまつわる様々な風説がある。例えば『弁惑金集談』（四卷四冊、宝曆九年刊、河田正矩著）卷四「信玄、禅僧を殺して逝去の事」には、信玄が禅僧の希庵を殺害した同月日に卒去したという説があげられ、それについて筆者の河田正矩が信玄を擁護する発言をしている。

卷五の四「信長夢ものがたりの事」

信長と信玄の争いの時、信長に仕えるある下位の者が度々高名を立て、大切にされていた。信長はその者に、死んだ後も息子を取り立てようと約束し、その後何某は討ち死した。しかし信長は諸事に紛れてその約束を忘れ、やがて天下を治めるようになる。何某の子も成人し、母に、外様奉公の身であるよりは国を出て立身したいと相談していた。その頃、信長の夢に何某が現れ、生前の約束の件を訴えたので、信長はその子呼び出し、様々な被物を授け、父の跡を継いで高名を成すよう励ましたという。

卷五の五「因果さんげの事」

①ある諸国行脚の僧が木曾の深山路で四十余りの大男に襲われ、諸経の入った包みを奪われるが、隙を見て男を崖から突き落とす。その夜、僧が宿で眠れずにいると、主人の男が戻り、妻女が応対する。男が、僧に峰から突き落とされたと話すと、僧が急いで逃げると、男は村人を連れて追いかけてきたので、僧は逃げ迷ったあげくに大木の上に登る。村人の一人が僧に気付いき、木に向かって大雁股を射るが、僧の代わりに荒熊が射られ、村人らを追い散らす。②逃れた僧がその日暮れに借りた宿は、昨晚と同じく妻女だけである。子の刻に主人が戻ると、家の内にいたと思われる男が主人を殺す。男は妻女と共謀して、死骸を桶に入れて僧に背負わせ、山中に行き、穴を掘らせて埋めようとする。僧は隙を見て男を殺し、また宿の女も殺して逃げる。③僧は美濃国へ着き、宿を求めたが、そこも女だけだったので、泊まらずに歩いたが、やがて日が暮れてしまう。古宮の拝殿に宿ると、痩せ衰えた男が杖を突いて現れ、僧が順縁によつて非業の死を遂げた自らの敵を討ってくれたおかげで、罪から免れることができたと告げ、また亡き跡を弔って欲しいと言う。そこで僧は夢から醒める。その後、僧は諸国行脚をやめ、京西山辺に住し道心堅固に暮らしたという。

『今昔物語集』二十九「阿弥陀聖、殺人宿其家被殺語第九」

阿弥陀仏を勧進する僧が、山中で出会った男から飯を分け与えられる。しかし僧は、その後、男を殺し、衣服と荷物を奪って逃げる。その夜僧が宿を借りると女が出てきて応対する。女は僧の衣の袖口が夫のものに似てい

るので不審に思い、隣人に相談すると、隣人は里の若者たちを集めて法師を捕らえ責める。僧が白状したので、人々は男の遺体を捜し出し、僧をその場で射殺した。人々は天が僧をお憎みになったのだと言いつつ合ったということだ。

○この『今昔物語集』の話は、山中で僧が男の荷物を奪い殺して逃げ、その夜に宿を借りるが、そこには殺した男の妻がおり、夫が僧に襲われたと知った女が、里人とともに僧を捕らえようとする、という話の筋で『曾呂里物語』当話と共通する。しかし『今昔物語集』のこの話では、『曾呂里物語』とは逆に僧が悪人として設定されており、僧は最後に男を殺した罪の報いを受けて殺される、という話となっている。

『宿直草』一の一「七命ほろびしあんぐはの事」△穎原・檜谷・岡▽

(1)行脚の僧が山路で、蛙が蛤輪を、蛇が蛙を、猪が蛇を、狩人が猪を捕るのを見る。僧は強者伏弱の道理を憐みつつ、②狩人の家に泊まる。夜更けに、一人の男が宿を訪れ、狩人の妻と共謀して狩人を殺し、死骸を革籠に入れて僧に背負わせ、山中に穴を掘らせ埋めようとする。僧は隙を見て男を殺し、逃げようとしたが(2)正直に告白するのが良いと思ひ直し、地頭に全てを訴えると、僧は褒美をもらい、妻女は罰せられたということである(後略)。

○(1)(2)は『曾呂里物語』五の五とは異なる話の部分。②は同話。そのうち

(1)は『曾呂里物語』五の六「よろつうへくの有事」の類話である。

『宿直草』五の七「学僧、ぬす人の家にやどかる事」△穎原・檜谷・岡▽

①慶長の初め、都の僧が饑別の金銀を持って関東に下った。信濃道で宿を借りたが、宿の主人と男たちが僧を殺そうと談合していたのを聞いたので逃げ、木の股に隠れる。宿の主人たちが追いかけてきて木の股を鏝で突くと、突かれたのは大熊で、突いた男を殺したので人々は逃げ、僧は難を逃れた。

『宿直草』五の八「道行僧山賊にあふ事」△檜谷・岡▽

②安芸広島島の僧が山中で山賊に会い、盗んだ荷物を持たされ連行されたが、隙を見て賊を崖から突き落として逃げる。その夜宿を借りると女がおり、誰かを待っている様子である。帰ってきたのは、僧が突き落とした男で

あったので、僧は驚いて逃げ、広島に帰ったということだ。

巻五の六「よろつうへくの有事」

土佐国の獵師の、みの庄右衛門が、ぬたで猪を狙っていると、蛙が蚯蚓を、蛇が蛙を、蛞蝓が蛇、猪が蛞蝓を食す。庄右衛門は猪を撃とうとするが思い直し、もし自分が猪を撃つたなら、何者かが自分の命を奪かもしれないと思い、また「みの庄(身の上)」という我が名の意味を悟り、帰ろうとすると、虚空から、庄右衛門は分別者だと笑う声が響いたので、恐ろしく思いながら帰った。ものの報いはこうしたことだけではなのだが、これを知らない人は愚かなことである。

『今昔物語集』十「莊子、見畜類所行走逃語第十三」△堤4、第二部第二章Ⅱ▽

莊子が鷲を打とうとすると、鷲は海老を、海老は小虫を狙っており、それぞれの敵に気付かない。莊子は悟ってその場を逃げた。これは賢いことで、人はこのように思うべきである(後略)。

『北野天神縁起』等の六道絵△山本・岡▽

○ 山本氏は、絵解きとしての話の構造と意図から、昔話「廻りもちの運命」よりも六道絵の話の方が『曾呂里物語』当話に近いと指摘。

『愛宕物語』(一冊、寛永二十年成)△岡▽

『宿直草』一の二「七命ほろびしるんぐはの事」△頼原・檜谷・岡▽

『堪忍記』(八卷八冊、万治二年刊、浅井了意著)二の七△堤2・須田▽

○ 蟪蛄が蟬を、雀が蟪蛄を、餌さしが雀を捕らえようとするが、餌さしは沼に踏み込んで泥まみれになるという教訓。

『本朝故事因縁集』五の百三十七「狩人遁世」△堤1・須田▽

天正十年六月に、弓の名手、丹波国龜山獵師親兵衛が谷川で、鼠が蟹を、鼬が鼠を、狸が鼬を、狼が狸を食い殺すのを見、狼を殺そうとするが、そうすると誰かが自分を殺すかもしれないと思ひ直してやめる。すると虚空から大声で、「良い思案だ、これを国主の明智光秀に告げよ」という。やがて、武田勝頼は多くの敵を、信長は勝頼を、光秀は信長を、秀吉は光秀を殺した。因果歴然であったので、獵師はすぐさま出家した。

○ この話は、獵師が改心すると虚空から声あつて獵師を褒めるといふ筋にお

いて、『曾呂里物語』当話により類似している。

『金玉ねぢぶくさ』(八卷八冊、元禄十七年刊、章花堂著)二の一「蟪蛄蟬をねらへば野鳥蟪蛄をねらふ」△堤1▽

○ 長崎の町人小柳仁兵衛、欲深きゆえに人々から嫌われる。蟪蛄は蟬を、野鳥は蟪蛄を、鳥さしは野鳥を狙うが、足を踏み外して岸へ落ちる。欲する時はまず物事の邪正をよく考えて行ふべきという教訓。なお堤氏は、『金玉ねぢぶくさ』二の一、『御前御伽婢子』(六卷六冊、元禄十五年刊、都の錦著)四の四の両話について、世俗的教訓を語ることに話の眼目が置かれているのに対し、同話材を扱った鎌倉期の浄土絵画(滋賀県聖聚来迎寺の六道絵等)では、畜生道の厭相を説いて殺生を戒める唱導説法が主題であったことを指摘する。

『諸仏感応見好書』(二卷二冊、享保十一年刊、猷山著)下「狐輪繩」△須田▽

○ 蟪蛄が蛙を、雀が蟪蛄を、餌さしが雀を取ろうとするのは、後ろに自分を害する物があることを知らない世俗の風勢と同じで、用心すべき、恐ろしいのは世の人心、という教訓話。

『日本昔話大成』六三五「廻りもちの運命」(AT331、AT20)の話型△山本・岡▽

男が腹痛を和尚に相談すると、腹に虫がいるから蛙を飲めばよいという。男が蛙を飲むと、痛みは治ったが、蛙が腹の中を歩くので退治しようと蛇を飲む。その後男は、雉、獵師、鬼を飲んだ。鬼の角で腹が痛んだが、和尚が男の口の中に豆を入れると、鬼が尻から逃げて入った。

三、まとめ

『曾呂里物語』諸話の類話は、仮名草子、仏教説話、中世説話、縁起、浮世草子、昔話といった多岐にわたる分野から見出すことができる。このうち、特に影響関係が考えられるのは『諸国百物語』で、『曾呂里物語』全四十一話のうち二十三話に類話があり、このうちの二十一話がほぼ同じ話である。『諸国百物語』は『曾呂里物語』よりも記述が詳細で、地名や人物名に『曾呂里物語』のそれらと似た名が見える。これらのことから、太刀川清氏や小澤江美子氏の指摘するように、『諸国百物語』の一部は『曾呂里物語』に基づいて記

されたものと考えてよい。また『諸国百物語』と同年の延宝五年刊の『宿直草』についても『曾呂里物語』の十二話に類話がみられる。ただし『宿直草』のそれらの話は、『諸国百物語』に比べると『曾呂里物語』との類似性はそれほど緊密ではない。しかし、『曾呂里物語』巻五の五のやや冗漫な長話が『宿直草』で三話に分けられるように記されていること等を考えると、『宿直草』は『曾呂里物語』に拠ったか、もしくは『曾呂里物語』と題材を共有しつつ、創作的姿勢をもって話を描きなおしたといえるだろう。

また『曾呂里物語』は、『今昔物語集』『古今著聞集』『宇治拾遺物語』等の中世説話との関係もあげられる。直接の影響関係は無いと思われるが、仏教説話とは性格の異なる、話の面白さそのものに眼目を置いたそれら説話集との話の類似は、『曾呂里物語』の成立基盤を探る手がかりともなる。

そのほか仏教説話との関連については、巻一の三、一の七、二の五、二の八、三の七、五の六に、『三国伝記』『因果物語』『奇異雑談集』『緇白往生伝』『北野天神縁起』等との類話があることが明らかになっている。また巻一の九の船越の大蛇退治譚は、『武將感状記』『諸家深秘録』といった軍記や武辺話にも類話がみられた。『曾呂里物語』は、堤邦彦氏の指摘するように、唱導説話を源としながらも奇談的性格が強調されたと思われる話が多い。またそれに加えると、戦国時代の武将の周辺から生まれたと思しき逸話も目に付く。そうした作品の成立基盤について、今後さらに調査を進めたい。

一覧中に△▽で示した論文一覧

△頼原▽頼原退蔵「近世小説の源流」(『頼原退蔵著作集』第一巻、一九八〇年、中央公論社、初出一九三八年)。

△榎谷▽榎谷昭彦「初期怪異小説の主役たち 曾呂里物語・御伽物語再考」(『国文学解釈と教材の研究』一九六四年八月)。

△今野1▽今野達「八枯骨報恩」の伝承と文芸(上) (『国文学言語と文芸』四十七号、一九六六年七月)。

△今野2▽同「遊士権斎の回國と近世怪異譚」(『専修国文』第二十四号、一九七九年一月)。

△太刀川▽太刀川清「近世怪異小説研究」(一九七九年、笠間書院)。

△堤1▽堤邦彦「近世怪異小説と仏書・その一——殺生の現報をめぐる」(『芸文研究』第四十七号、一九八五年十二月)。

△小澤▽小澤江美子「延宝期の怪異小説考——『曾呂里物語』から『諸国百物語』へ」(『大妻女子大学大学院 文学研究科論集』第二号、一九九二年三月)。

△山本▽山本則之「六道絵と『曾呂里物語』巻五第六話」(『説話文学研究』二十七号、一九九二年六月)。

△須田▽須田千里「京都大学蔵 大惣本稀書集成」第八卷(一九九五年、臨川書店)「本朝故事因縁集」解題。

△和田▽和田恭幸「咄之本の素材——奇異雑談の世界——」(『散文文学△説話▽の世界』講座 日本伝承文学四、一九九六年、三弥井書店)。

△堤2▽堤邦彦「近世仏教説話の研究——唱導と文芸」(翰林書房、一九九六年)。

△堤3▽同「近世説話と禪僧」(和泉書院、一九九九年)。

△花田▽花田富二夫「伽婢子」(『新古典文学大系』二〇〇一年、岩波書店)注。

△堤4▽堤邦彦「江戸の怪異譚 地下水脈の系譜」(ベリかん社、二〇〇四年)。

△堤5▽同「地方資料の発掘——雑談、夜話の原風景」(『国文学 解釈と教材の研究』五十巻一十一号、二〇〇六年十月)。

△江本▽江本裕「延宝期の仮名草子『諸国百物語』序説」(『西鶴と浮世草子研究』第二号、笠間書院、二〇〇七年十一月)。

△堤6▽堤邦彦「江戸の高僧伝説」(三弥井書店、二〇〇八年)第三篇VI。

(注)

- (1) △江本▽論文に同じ。
- (2) 池上洵一「『三国伝記』(上)」(『中世の文学』三弥井書店、一九七六年)注。
- (3) 市古貞次「楊鴨隨筆」(『中世の文学』三弥井書店、一九九二年)注。
- (4) 後藤丹治「『中世国文学研究』(磯部甲陽堂、一九四三年)第一篇第五章第二節「幻夢物語」。

(5) 西沢正二氏「『幻夢物語』と『三国伝記』との関係」(『国文学解釈と教材の研究』一九七〇年十二月)。

- (6) 近藤瑞木「怪談物読本の展開」(『西鶴と浮世草子研究』第二号、二〇〇七年十一月)。
- (7) 八今野 2 / 論文に同じ。
- (8) 広瀬朝光『小泉八雲論 研究と資料』笠間書院、一九七六年。
- (9) 水野ゆき子「耳なし法師のはなし」『曾呂利物語』を中心に―(『金城国文』七十八号、二〇〇二年三月)。
- (10) 当麻晴仁「『新御伽婢子』考―片仮名本『因果物語』との関係―」(『青山語文』第二十二号、一九九二年三月)。

A Study of the Similar Story of “SORORI-MONOGATARI”

Yoshiko YUASA

Department of Japanese Language

Abstract

The “SORORI-MONOGATARI” is a source of the ghost story in the Edo Period Literature. This story owns jointly same topics in the various field literary work, for example KANA-SOSHI, Buddhist story, the Medieval Period Literature, the history of a temple, UKIYO-SOSHI, and an old tale. Especially, ”SYOKOKU-MONOGATARI” is influence of “SORORI-MONOGATARI”. And “TONOI-GUSA” will be presume an influence of “SORORI-MONOGATARI” too. In addition, “KONZYAKU-MONOGATARISYU”, “INGA-MONOGATARI”, “SHIIHAKU-OUZYOU-DEN”, “KITANO-TENJIN-ENGI” ,and “BUSYO-KANZYOU-KI”, ”SYOKE-SINPIROKU” are influence of “SORORI-MONOGATARI”. “SORORI-MONOGATARI” is emphasises a property of a strange story, and a anecdote story of a samurai class.

Key words: narration, a ghost story, Kana-Zoshi, Hyaku-Monogatari

『曾呂里物語』の類話

湯 浅 佳 子

日本語・日本文学分野*

要 旨

『曾呂里物語』（五卷五冊，寛文三年刊）は，近世怪異小説の源流とされる仮名草子である。本稿では，先行研究をふまえつつ，『曾呂里物語』諸話について類話をあげ，当作品の成立の背景について考える。『曾呂里物語』諸話の類話は，仮名草子，仏教説話，中世説話，縁起，浮世草子，昔話といった分野から見出せる。特に『諸国百物語』は，『曾呂里物語』に拠った作品であり，また『宿直草』についても『曾呂里物語』からの影響関係が考えられることは，先行研究に指摘が備わる。『曾呂里物語』へ影響を与えた作品については，『今昔物語集』『古今著聞集』『宇治拾遺物語』等の中世説話，『三国伝記』『因果物語』『緇白往生伝』『北野天神縁起』等の仏教説話，『武将感状記』『諸家深秘録』等の軍記や武辺話がある。『曾呂里物語』は，唱導説話を源の一としながらも奇談的性格が強調されている話が多い。また，戦国時代の武将の周辺から生まれたと思しき逸話も目に付く。

キーワード: 説話, 怪異譚, 仮名草子, 百物語

* Department of Japanese Language